道路改良會首腦部と道路問題の推移

――常務理事佐上信一氏――（上）

清水生

安藝は勤王思想源泉の地

回顧すると筆者は今から十七八年以前に床次、小橋の兩先輩に隨行して熊本から鹿兒島に赴いたことがある。その歸途筆者は一行と廣島で別れて杵島姫命を祭神とする嚴島神社に參拜すべく旅館岩惣に一泊したことがあつた、その一室の床の掛軸には嘗て伊藤公がこの地に遊んだ際に書かれたのであるといはれる。

嚴島風雲幾變遷　天妃祠畔浪摩天
當年破賊英雄業　豈爾芳名千古傳

の七語絶句が春畝山人の雅號で揮毫されてゐる。筆者はこれを見て代々中國の西部に雄視してその富强を誇つてゐた大内氏は義隆に至つて驕奢を極めて武備を怠り、天正十二年にその臣陶晴賢に殺せられたのを、毛利元就は故主の仇を復するを名として兵力を集めたが、陶の兵力が數倍してゐるので奇計を案出して嚴島に城を築き反間を放ちて此島は毛利には不利なる地點だと流言をさせたので、晴賢これを信じて弘正元年九月にこの地に兵を動かしたが、元就のために不意を衝かれて極度に狼狽大敗して遂に彼れは逃れ損じて自刄した所謂嚴島合戰を詠じたるものであらうと思ひつゝ岩惣に一夜を明かした筆者は、翌朝嚴島神社の參拜を了へて延長百八間の永き廻廊を歩みつゝ内湖の如き浪靜かなる瀬戸内海を隔てゝ遙かに山陽山陰の背骨を形成する所謂中國山脈を遠望して、不圖口にすさんだのは……安藝はよいとこ、靜かなところ、こゝから勤王の芽が出る……との駄句であつた、いたづら好きな筆者はこれを紙片に書いて廻廊の柱にはりつけて置いたことを今尙記憶してゐる。

不朽の名著日本外史起稿の地

聞けば廣島の袋町には指定史蹟として賴春水の舊宅で其の子山陽が不朽の名著と謳はれる彼の日本外史の稿を起した小室は今尙舊態その儘の姿にて保存されてゐるとのことであるが、思ふに德川氏が自家の利益のために極力鼓吹せる忠義の精神は我國の歷史が明かになるに從つて其君に向つて發せずして、君の君に向つて發するに至つたのである、而して彼の革新的思想の鼓吹者として佛蘭西革命におけるヴォルテールの如く、また伊太利建國におけるマジニの如く最も重要なる役割を勤めたものは往年の年少改革家であつた伊藤博文が洋行の笈中にも携帶したと云ふ日本政記の著者賴山陽其人である。政記は云ふまでもなく漢學の改革的原理によつて日本歷史を批判せるもの、また不忠不臣の德川を反語的に尊皇忠臣と稱揚して、その端を拓ける鎌倉幕府を以て亂臣賊子と筆誅することによつて倒幕改革を暗示せる山陽の日本外史は實に我國に勤皇の意義を徹底的に認識せしめ、志士をして決然これに嚮ふの氣を發揮せしめ

た眞に絶群の改革文學であつたのである、山陽の生地は大阪であるが間もなく廣島に移つて寛政九年彼が十九歳の時に江戸に出て約一年間遊學した外は三十歳に至るまで廣島に居住して居る、寛永十二年彼は藩許を得ずして密かに京都に奔つたが、間もなく連れ戻されて、門脇の粗末なる六疊と三疊の建物内に檻禁せらるゝこと一年更に謹愼二年、續いて屏居三年合せて五ケ年間は一歩と雖も外出することを禁ぜられたのであつたが、而も彼の決意は益々固く屈するところは毫末もなくて、修史の念は益々堅くその陋屋から迸り出でた彼の正氣は享和元年起稿して約二十年の永き歳月を費して完成したる前記の如く日本外史となつて現はれたのである、その内容に至つては筆を源平二氏から起して德川に至るまでの武家の興亡を叙しその中に尊王賤覇の意を寓したるものであり、筆力の雄健字々躍動するの概がある、この外に日本政記、通義春水講義、先友錄、山陽文集、山陽詩鈔、山陽遺稿等多々あるが、廣島の地は明治維新の原動力となつたかゝる先覺者の鄕里であつたことに思を致して筆者は計らずも尊皇の芽がこの地から出たところと云つたのであつた。

かゝる地に佐上氏は生る

本會の常務理事である佐上信一氏はかゝる地に生を享けて現在我國が慾するところの人材の一人である、こゝに氏の略歴を見ると。氏は、縣下兵次郎といはるゝ人の長男として明治十五年十二月十九日に丁度嚴島から見て眞正面に當る五日市に生れてゐる、中學高等學校と順次何れも優秀の成績で進んで東京帝國大學に入り同四十三年に法科を卒業更に高等文官試驗に合格して官界にその一歩を踏み入れ東京府屬兼内務屬東京府試補等を經て鳥取熊本の各縣理事官となつてゐる、更に内務省書記官となつて本省に入つて鐵道省書記官を兼任し土木局道路課長を經て内務參事官兼内務大臣秘書官となつたが當時の内務大臣は現在本會の會長である水野錬太郎氏であつた。更に累進して内務監察官神社局長として勅任官に進み明治神宮造營局長、造神宮副使を兼ねて居たが間もなく轉じて、岡山長崎の各縣に知事

として地方牧民官となつて行政の第一線に起ちて縣民のために盡すところがあつたが再び本省に戻つて內務地方局長の椅子に付いて居る、而して氏は再び三府の一つたる京都府に長官として赴任し更に、昭和六年には北海道長官に昇進して鋭意北海の開拓に力を致して大いに功績を擧げて同十一年四月に後進に途を拓くために退官したのであつた、其後氏は民間に在つて種々公共團體等に關係をして居るが現に大日本防空協會の常務理事並に本會の常務理事等になつて居る、亦氏は在官時代に歐米各國を歷遊して廣く彼地の文物制度を視察して歸朝するや、氏の卓拔なる識見は直ち彼の長を執り我の短を補ひ以て行政方面にも寄與するところ多大であつたのである、玆で氏の家庭を覘くと、家代々の宗教は眞宗に屬して賢妻博女は明治二十四年生れで新潟縣の舊家渡邊文治郎氏の長女で廣島高女を出身した才識のある所謂賢夫人である、亦嗣子正弘氏は大正二年の生れで慶大出身の材幹である、その外に七女二男を有する子福者である。

佐上氏と指導階級論

斯樣に佐上氏はその閱歷に於て亦その過去の行政的手腕に於て現下決戰體制に於ける所謂指導階級に屬する一人材であることは何人と雖も首肯するところであるが然らばその指導階級に屬する人物の資格は果して如何なるものであるかに付いては世上には種々の見方をなす者がある、現に或る社會學者はこれが資格を列擧せる勞頭に於いて、愛國主義の抱懷者を以てし、それに附加して健康、信仰、勇氣、耐忍、公德心に富めるを以て主なる要素としてゐる、亦一人の社會學者は同情心に滿てる人、若くは自持自賴の精神に富める紳士を以て最適任者と主張してゐる、また筆者の私淑して居る或る禪僧は身を以て率ゆる人民心の嚮ふる所を洞察してこれを支持し得る人を以てしてゐる、又某大學の教授は自信力の强い人、自己の意見を自由自在に表白して以て人を感動せしむるに足る人、若くは健筆家も指導者たる者の資格に數ふべしと云つてゐる、更に或る人の如きは恰も凱旋將軍が運命を賭して凡ゆる策戰の下に捷利の月

桂冠を戴きしが如き眞劍味を帶びたる所謂勇氣ある人を擧げてゐる、併し古來洋の東西を通じて觀察すれば人格者、人を魅する人格者、親み易き人品、堅實、銳敏、勤勉、確乎不動、忍耐、實力豐富、勇氣、大膽、廉潔等の個性は悉く社會指導者の資格を語るものであると思はれるのである、昔儒潘陽節治道を論じて……天下を治むる道あり、賢に親みて、姦を遠け、明にして已む、天下を治むる本あり、禮樂教化、順にして已む、明なれば則ち君子進みて小人退き、斷あれば則ち功を勸むるにあつて罪を懲らすあり、順なれば則ち萬事理なり、人心悅むで天下和す、三者の要は身に在り、身端うして心誠なれば命せずして行はる……とあるがこれが全くゲーテーの所謂……最良の政治とは如何に已れ自身を治むべきやの範を民衆に垂るるにあるを謂ふ……とあるに合致するものであつて、所謂世の指導者爲政者行政官等の鑑みざる可からざるの至言であると思はれる。

佐上氏を訪ふ

偖て筆者はかやうなことを胸に浮びつゝ敬友平井氏に伴なはれて某日大日本防空協會に佐上氏を訪問したのであつた、常務理事室に於て平井氏に紹介された筆者の氏に對する直感は所謂指導階級中の資格たる、親み易き人品、勤勉、實力豐富、勇氣、等々を抱持する人物たることを測知したのであつた、先づ簡單に初對面の挨拶を取り交した後ち筆者は我國の道路についての所見と云ふやうなことに話が及ぶと佐上氏は。

我國の道路も大正の始めから改良が叫ばれて、以來約二十年間に於て、國または公共團體に於いてその力の限り整備充實に力を注いで多少はその實現されたが、未だ我國の道路の改良は不十分の點が多々ある、併しこれは財政の關係や殊に現下の時局に於ては資材關係等について道路改良當局の苦心は察するに餘りがある。

と、氏は縷々我國の過去における道路政策及び現在非常時決戰體制下と資材と道路關係について語られたあとに引續いで。

私は現在の我國の道路について考へるところは、未開

發地方における道路の開鑿改良である、歐米の道路などは我國の道路と比較すると、幹線道路に於ては劣つてゐるか、開發資源のあるところに聯絡する道路の建設改良は進んで居る、此點は我國では今後大いに考へなければならぬと思はれる。……現に北海道の拓殖その主力點は移民の開墾事業、その生産を輸送すべき起點、鐵道停車場や港灣との聯絡を整備するに北海道開發の重點を置いて從つて道路問題もこれに順應してやつたがために現在の北海道はこの戰時下における我國の食糧問題に多大なる貢献をして居る。……私が長官時代卽ち岡田齋藤兩內閣の時に北海道の地方振興事業を計畫して以て僻遠地の道路改良に三四千萬圓の經費を投じて道路の布設橋梁の架設等に力を致したが、夫れが現在時局に對應し北海道の北方資源は益々開發せられて軍事資材または一般國民の生活資料に大いに役立つてゐる。

と、北海道の開拓並に產業は十年以來飛躍的なる進步を遂げたことは資源の開發のために、この線に副ふて僻地にも道路の開鑿が行はれたる結果であることを佐上氏は述べて更に言葉をついで。

資源開發道路

この著しい例は我が國策の滿洲に於ける移民地の現狀から見ると、一番困つて居るのは滿洲開拓道路の開鑿である、夫れは滿洲は地質の關係と氣候等の關係上僻地の道路開鑿の事業は內地に比較して容易ではない、これが滿洲の物質の供給及び運搬上に大なる障害となつて居り亦、他面に於ては滿洲開發の弱點である、故に滿洲には尙一段と開拓道路に力を注ぐ必要がある、一方內地に於ても農業は一種の溫體農業で米麥を中心として平地域農業である、今日國民の食料の自給關係上未開墾の土地が非常に殘つて居るが、これ等の土地は所謂溫體農業には適してゐない高原地帶の開發であるから北方農業と同樣に開墾して行けば生活資源の增加を見て現下の國情に對應することが出來得るのである、現に高原開發事業として彼の八ケ岳の山麓や岐阜縣俱上でやつて居るのを見て

も開發道路は必要である。

とて、氏は幹線道路も勿論等閑視するのではないが資源關係とに睨合せて地方開發道路の布設の必要なる所以を力說して道路法は府縣道路を認めて補助してゐるが、新しき資源開發に關聯する所謂開發道路には高率の國庫補助をなす新道路政策が肝要たることを縷々述べて、これを歐米の例にとつて、彼のアルプス高原地帶の開發は總て玆に開鑿された開發道路の力であることを具體的に例を擧げて話されたあとに、京都、岡山、長崎の府縣知事時代にも農村資源開發道路につい力を注いたか、當時かゝる不急の事業との議論もあつたが然るに後ちにこれが大いに役立つに至つたことを語つて氏は開發道路の充實必要を論ぜられたが、筆者は最近新聞紙上に於て、愛媛縣三崎半島の產銅地帶開發計畫に伴ひ同縣では昭和二十年度完成豫定を以て西宇和地方開發事業を實施することに縣會に於て決定と共に帝國鑛發に對する工事負擔金について協議中であつたが、この程三線に對する工費の三分の一の負擔を決定した。これがため

三崎半島の產銅地帶開發事業は一層の發展が期待されてゐる、と報じて居るのを見て現下の國情から觀察して佐上氏の力說せらるゝ地方資源開發に重大の影響を齎らす所謂開發道路開鑿の必要を一層深く痛感するのである。

理性ばかりでは行かぬ

佐上氏と筆者の對話は轉じて官界に於ける一般的の感想といふやうなことを率直に聞いて見たか、氏はこれに對して。

一體官界の仕事といふものは一般的には理性が主となつて働くのであるが、私が官界で地方の仕事をやつて見て一般大衆は理性中心の官僚的よりは實際は感情が非常に强い力を以て働いて居ることを痛感したのである、一般官界は理性に重きを置いて感情を無視して居るが、感情もよい感情を持たせてやつて行くことが必要と思ふたのである、夫れには地方の主腦部である知事若くは部長等が短期間に轉任したりせずして、永く任地に止まつて對等の交りをして地方の人々によい感じを持つやうにす

ると彼等は喜んでついて來る、この氣風を浸透さすことは必要である、元々日本では現性は強く感情は弱いが然し人間と云ふものは理性ばかりでは良く物事を處理して行けぬものであるから感情と云ふことを克く取入れて利用することは官界でも大事のことである、理性ばかりの仕事は殘らないが感情の仕事はあとに殘つてゐるのを見ても判ると思ふのである。

と、氏は人間味から說いて行政官と理性感情論について氏の見解を披瀝されたが筆者も亦「人は感情の動物」である限り爲政者、指導者は理性のみを以て民衆に對處することは却つて行政官としての效果少なく民衆の感情を克く理解してこれに行政官としての意見を加味して善所することは最良なる牧民官ではないかと思ふのである。氏との話は更に轉じて、山陽外史に及んだが。

回顧すると、大正十四年私が岡山縣知事時代に　今上陛下が未だ攝政であらせられた時に最後の地方行幸で山口廣島岡山の三縣下を御巡覽されるとの御內命に接したのであつた、夫れで昔の偉人傑士の遺跡等の叡覽を願ふことになり、山口縣では松下村塾、岡山縣では閑谷黌、廣島縣では賴春水の舊宅で山陽が幽居中に稿を起したと云はるゝ彼の不朽の名著日本外史を書いた山陽遺蹟を以てしたのであつた、二十五萬圓を投じて財團法人山陽顯彰會を設立して山陽幽居の傍らに山陽紀念館を建設して山陽の貴重なる遺品が蒐集陳列されてゐて、こゝが山陽精神の發揚の中心をなしてゐる。

と、氏は山陽その人とその精神について縷々語られたのであつた。これが大體佐上氏と筆者との初對面に於ける氏の談の大要である、氏は防空協會の常務理事として頗る多忙に見受けられたのでこの位にして辭去したのである。

英國の道路改良會の活動

氏は嘗て實地視察したところの英國の道路改良の原動力たる英國道路改良會の活動の現況を數年以前にこのやうに書いでゐるが、現在の英國は吾々はあくまで擊滅せねば止まざる敵國ではあるが併し彼れの取つて以て參考となるこ

とは敵國たりとの理由を以て敢て拒否するが如き我が國民は偏狹ではないと思はれるので茲に摘記すると。

抑々英國の道路改良會は創立以來既に五十餘年の星霜を經て此の種の團體中では相當の歷史を有して居る、道路の改良と交通系統改良との目的を達成するが爲めに道路交通の形式と變質とを一致せしめなければならぬと云ふことが英國道路改良會の强い主張である。

と同改良會の主張を先づ云つて、英國道路改良會が完成したる主要なるもの卽ち。道路事業に對する國庫補助制度の確立、道路築造改良工法の採用、道路改良に關する教育的宣傳の普及、道路交通系統の改善、平滑路面に對する轉滑防止運動、道路標識、其の他指導標の改良、地方道路の改良促進並に通信交換の實行等を擧げて。

曩の歐洲戰爭の勃發が其の活動に少なからぬ障害を與へたことは爭はれない事實である、戰爭の終了を見るや英國道路改良會は更に其の陣容を新にして積極的に其の活動に邁進するに至つたのであつた。

とて地方開發道路の計畫、英國道路改良會支部の進展、英國議會に對する英國道路改良會の活動、道路改良會基金制度の復活、道路に關する各種提議の調査、道路技術者の養成と其の地位の向上等その活動の主要なる項目を擧げて一ち〳〵說明を加へて、最後に英國道路改良會の發展せる良道路の必要と題する宣言を附加して廣く參考に供したいと氏は。

良道路の必要

完全なる道路は進步せる文明の表徵である、其の國の良道路に依つて其の國の文化の程度を知れ、道路は國民の國內交通に必要あるのみならず、農產物、食糧品、石炭、其の他一般生活上に必要なる總ての物資を經濟的に且容易に運搬するに必要缺くべからざるものである、道路は勞働者をして工場を離れて生活せしめ、工場の存する住民の過剩なる都市を離れ新鮮なる空氣中に起居せしむることを得るのである、道路は鐵道の榮養線たるの役を勤め同時にその混雜を緩和するの任務を完うする。

と道路の效果を述べて良道路は地方開發並に工業の發達に資する所多大なるを說いて。

道路は國家的の交通機關であつて最早や其の交通系統は專ら一地方の必要のみに局限せらるべきものではない。更れば道路の統一は極めて緊要の事項であつて、其の築造及維持修繕が一國内に於て區々に統一を缺くが如きは全く過去の事象であつて現代の切實なる要求に副ふものではないのである。

更に進んで道路の築造及維持と道路技術者の問題に論及して次いで。

良道路は常に頭腦を用ひ不斷の注意を怠らず費用を巧妙なる使用によつてのみ其の終局の目的を達し得べきである。道路築造技術に關する專門教育を授くることは最も刻下の急務であつて、道路築造技術の特別實地練習は道路の管理及道路に公共の費用を投下する際に於て先づ何よりも眞先に著手せらるべき問題である。英國の通商の繁榮住宅建設の進行及公衆衞生の進步等は何れも主として良道路に基かざるはないのである。而して是等の諸點が行政廳及一般公衆によつて實現せられ、且つ我が道路が一般より必要なる注意と考慮を拂はるゝに至らむことを期するは英國道路改良會の抱懷する一定不變の大目的である。

と結んでゐるが、道路は如何に一國の殖產興業の上に於て果たまた所謂富國强兵策の上に於て必要なるは玆に論ずるまでもないから省略するが佐上氏の英國道路改良會の活動狀況と題する發表を見ると決して他山の石として視るべきではなくこゝに大いに裨益するところがある。

佐上氏は健筆家である

佐上氏は却々の健筆家である。現に氏が雜誌其の他に書いて居るその内道路に關係する題目だけ撰んで見ても、英國道路改良會の活動、海峽植民地の瞥見、ヴインゾル一日の消遙等々を始め道路課長時代には倫敦と巡査を中心として、又歐米都市の交通整理、道路改良と產業道路、我國の道路の旣往と將來を眺めて、と題して起稿してゐる。更に

岡山縣知事時代にはストラースブルヒの思出、地方局長時代には道路費の修約的使用、更に神社局長時代には佛蘭西道路の印象等々があるが、その雄渾なる筆は人をして知らず〳〵の間に魅するところがある。大正十三年頃內務省の神社局長時代に書いた「海峽植民地の道路瞥見」は大東亞戰爭の勃發によつて既に我が精鋭無比の皇軍に占領されて着々その建設が進捗しつゝある地帶であるだけに吾人の注意を引くものが多々ある。氏は、

新嘉坡は英國の經營に係る海峽植民地の一で「氏がこれを書いた當時は英國はこゝを東洋制覇の根據地として東亞搾取の魔手を延ばしつゝあつたが、昭和十七年二月十五日我軍に依つて陷落したのである」馬來半島の南端に位し、赤道を距る僅かに八十海里の北にあり、人口約四十萬で支那人の數も少くないが、黃黑色の馬來人、漆黑の印度人等は市內を橫行してゐるのを見ると遙かに異鄕にゐるの感を催さざるを得ないと。

先づシンガポール市內の情調を描寫して。

新嘉坡の重要道路は幅員廣濶にして自動車の交通に支障なく、路面はアスフアルト其他の鋪裝材料を以て車行極めて快適である。又街路の維持修繕は比較的行屆いて黑面の道路掃除人が常に各所で馬糞、其の他の汚物を掃除しつゝあるのみならず、街路洗滌用の水道も備はり撒水又は路面洗滌の用に供せられて居る。

かやうに新嘉坡の道路の良いことを傳へて。

新嘉坡のやうな赤道附近に位する土地では樹木の繁茂極めて盛なるか故に道路に植栽せられた並木の如きも、其の樹種の豐富にして且つ樹姿の艶麗なるは多く他に其の比を見ない程であつて樹木の單調に飽ける吾人を羨ましむること大である。殊に一年を通じて炎暑燒くが如き氣候の中に生活する者には朝夕街路樹の樹頭に戰ぐ淸風に萬斛の凉味を感得することが如何に生活上の慰安を與へることであらう。

と彼等の炎暑に對する生活上の苦痛を察し。更に新たの感を起させるのは道路並木に棉の樹、合歡の樹、椰子の樹等

が植ゑられてあることを書いて、

道路に固有名稱を附す

新嘉坡の道路は上海のそれに比して幅員廣濶なるが上に交通が頻繁と云ふ程でないので、交通の整理は上海で見るが如く活潑ではない、只自動車定員の制限や、荷車積載量の制限は極めて嚴重であつて之に依つて勉めて事前に事故の發生を豫防せんとして居る。こゝでは歐米式に何れの道路にも固有の名稱を付し、之を街角に掲出し通行者の利便に供して居る。

とて平素この點について多大の不便を應じつゝある我國に於ても固有の名稱を附して街角に掲ぐることは必要であることを述べて、新嘉坡の郊外道路の視察に移つて。

新嘉坡の郊外道路は市を中心として交通の程度に應じて六哩以内はターマカダム又はアスファルト、コンクートの構造となし、六哩以外は普通のマカダム道路である。何れも幅員は廣濶であつて且つ道路の系統も極めて佳良である。道路の各區間には道路掃除人の外、道路監視人及道路副監視人を置き、道路の損壞其の他の事由に依り修繕を要する場合は最初に之を發見した者が電話等によつて道路監視人に通じ急速に道路の修繕工事に着手する外絶ゑず其の受持區内を巡視して、道路の狀態を査察し、以て適當の措置を講すると共に常に道路掃除人を督勵して、道路の清潔を保持するに努めて居る。余の視察當時も路面使用の結果定規以下に下つた道路面の改造に着手し現に十數臺の修繕用のローラーは盛に新嘉坡市の内外を活動して居るのを見た。

佐上氏はかやうに新嘉坡の郊外道路の實地視察を書いて次で娯樂用の道路の施設に及んで。

新嘉坡灣を抱擁すする一帶の地域には公園と並んで壯麗なる散歩道を作り、其の道路の兩側には種々の花壇を設け之を散歩するものにして身の公園にあると同一の感を懷かしめて居る、又新嘉坡の波止場を起點としてオーチャードロードを經て名高き植物園を一周し幾多椰子園や護謨園の間を縫ひ山の手を大迂廻して、ヒルロードを

或は上り、或は下りて山巓に達し、印度洋の海波漂渺たる大景を一眸の中に收め、更に自動車にて四十分の行程を經て、波止場に廻歸する周遊道路の如き、蓋し其の規模形勝の雄大なる。稀に觀る所である。

と、氏は新嘉坡娯樂用道路の一周觀を書いてゐる。次には印度古倫母の道路視察に移つて。

古倫母の道路について

古倫母はセイロン島の一角に位する英國の經營に得る開港場であるが「這般屢々我が荒鷲が空襲したところ」市内道路の主要なるものは幅員廣濶なるも、其の他は幅員概して狹少なるを免れない、只だ歩道を軒下に設けて災天の下に於ても日蔭を通行することを得るやうな設備をして居る。市内道路の鋪裝はアスフルトマカダム又はターマカダムを用ひて居るが、鐵輪の車輛も少くないので之が路面破壞の原因を爲して居るので常に道路の維持修繕に注意を加へ黄い額の道路工夫は燒け附くか如き炎暑と戰ひつゝ、スチームローラーを運轉させて修繕工事を執行しつゝあるのを見た、古倫母の市内道路の幅員が狹少であり、且つ交通が頻繁なるがために交通の整理に力を用ひて居ければども土地柄萬事が紛雜の感あるを免れない、道路の交叉點には道路標識を設け車馬の交通する方向を指示すると共に跣足のまゝの交通巡査は街角に佇立して手を上下して道路を開閉して居る狀態は稱や奇拔の感がある。

更に古倫母郊外の道路に及んで、

郊外の道路は幅員廣濶と云ふにあらざれども電柱等は整然として何れも道路敷地以外に建設せられて交通を妨ぐるものなく、路面の如き交通の頻繁なる個所はターマカダムを以て鋪裝し然らざる個所は交通の狀態に適應して鋪裝を省略せられた個所が少くない。此の地方は雨量が極めて少きかためか道路に砂塵の飛ぶことは珍しからず、されば郊外道路にも撒水車を使用して砂塵に力を致して居る個所が澤山にある。郊外道路の並木の美觀は先に新嘉坡に就て一言したが、古倫母に於て更に其の感を

深くした。

かやうに氏はコロンボの郊外道路について視察したところを平易的に面白く書いてゐる。

坡土西の道路と海峡植民地の道路概觀

更に氏は筆を進めてスエズ運河の河口にある一都市の坡土西の道路を書いてゐるがこれに依ると。

坡土西……此の地は水上交通が發達せる爲め海岸線を除く外はさしたる立派な道路はない、市街の重要街路にも石敷のもの多く、又新に開設せられたる市内道路にしてマタダム方の築造法を採れる等之を他に比して大に時代遲れの感がある。アフリカの砂漠の一隅に存するが爲め、地質良好ならず、道路並木の如き發育全からずして之を他の海峡植民地のそれに比すべくもない。道路は坡土西が一番振はない感がある。

と、スエズ運河地帶附近の道路の貧弱なることを述べて結論として。

海峡植民地の道路に關して述ぶべきことは少くないが、唯何人にも日本の地を離れ、印度洋を經て歐洲に航行する者が皆申合せたやうに道路に關する所感を寄せて、海峡植民地道路の完備を說かぬもののないのは特に注目に値する。東洋の文化國と誇る我國人が、比較的非文化國を以て處遇する支那や海峡植民地の道路を觀て感嘆の聲を惜まざる所以のものは、文化國としての我國の施設中、道路が一番遲れて居る爲めであるまいか、獨逸の諺に其の國の道路を見て其の國の文野を知れと言つたことがあるが、若しこの諺が眞理であるとすれば現狀の如き道路を有する我國は果して文化國の一に居ると稱することが出來るや否や。

と佐上氏は海峡植民地の道路と我國の道路とを比較して以て道路改良に一層力を注ぐべきことの注意を喚起してゐる。（以下次號）

× × ×